



# 6・23 反戦行動に向けて

○ ウィズ・ウォー・

「ザ・カミング・ウォー・ワイズ・ジャパン」という本が、日本でベストセラーになつてゐる。書いた人はアメリカ人の政治学者だから、題名は「日米戦争が近づいている」ということだ。この本は、結論として「基本的に、問題は一九四一年当時とほとんど同じである。日本は東南アジアおよび印度洋の鉱物資源供給路を支配する一方、政治的に支配可能な輸出市場を確保する必要がある。そのためには、日本はアメリカを西太平洋から追い出さなければならない。

米両国は冷戦状態を迎へ、それは極端な場合、武力戦へと発展しかねない」「戦争を予言するよりも、いかに戦うべきかを考えるほうが難しい。しかしその二つよりも、戦争を阻止する道を探るほうがあつと難しい」と述べている。もちろん、労働者の立場からすれば、書かれていることに疑問はいづらさがある。しかし、こんな本が飛びように売れるほど、日米、そして世界は緊張の淵にたつてゐる。

## 「戦争」はどうやってやつてやつて来たか?

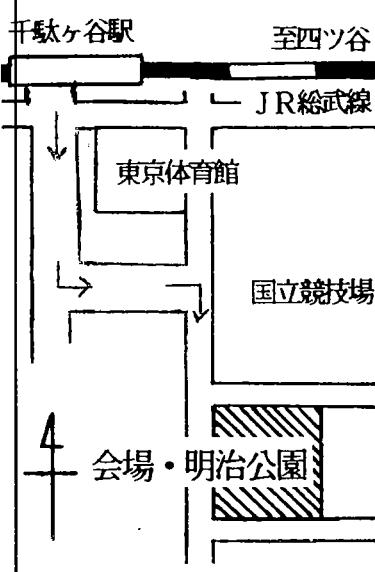
ところで、われわれは、「戦争反対なんてあたりまえだ」「みんな戦争なんて起こりはしないよ」と誰もが思いながら、今まで何度となく戦争を「経験」してしまつたのはどうしてなのか、戦争はどうやってやつてきたのか、「まさか」がまさかでなくなるときについて真剣に考えなければならぬ。

今日は、ドイツの例である。ドイツは、ナチス・ヒットラーの支

配のもとに、戦争に突入、六百万人のユダヤ人を強制収容所で虐殺した。少し長くなるが、次に掲げるのは、『彼らは自由だと思つてゐた』という本に書かれている、あるドイツ人の「告白」だ。質問者は、何故ドイツ人はあの異常きわまりない支配を黙つて見すごしたものか、まさに「平氣」でいられたのか、何故あれほど倒錯した世界の住人として「平氣」でいたのか、という疑問を解こうとしている。

東京・明治公園  
正午から

[会場案内図]



たしかに、自衛隊派兵もPKOも「平和のため」「国際貢献」と極めてうまく説明されている。何の抗議もきこえない。みんな幸福そうに見える。自衛隊を海外に派兵することなど、数年前なら考えられなかつたことだ。一つひとつ

の事件は、確かに以前より悪くなつてゐる。しかし、「戦争反対の戦いに起ちあがろう」などと言つても、「そんな悪い世の中じゃないよ」と言われる。……そして、次の機会を待つことになる。……

○ 「戦争」について考える!  
3

○ 全てがうまく説明され